縄文土器をめぐって
——研究史の中から——

麻生　優

1）加曽利貝塚の土器は、なぜ大切か

明治・大正期を通じて日本考古学では、人種論研究が盛んであった。それは招喚外国人研究者の日本人に対する関心と、鎖国から解放された日本人の自意識の芽ばえによるものであった（麻生　1975）。アイヌ説、プレアイヌ説、混血説、コロボックル説等枚挙にいとまがないほどの説が提示された。その有力な基礎資料として、人骨採集の努力が積極的にはらわれ始めたのは、大正5，6年頃であった。このような情勢の中で、東京人類学会遠足会等によって比較的早くから良好な人骨資料が発掘されていたのが千葉県加曽利貝塚であり、小金井良精の調査対象にもされたのである。

1924年（大正13年）、東京大学人類学教室の小金井を中心とする一行は、加曽利貝塚の発掘を試みた結果、人骨3体と大箱10杯分の土器とを採集した（八幡　1924）。この時の成果は、人骨のみならず縄文土器研究にも大きな足跡を残したのである。それは、発掘地点別に土器型式の違いを明らかにし、これにそれぞれ「加曽利B式土器」、「加曽利E式土器」の名称を与え、それ以後長く学会にその名をとどめることとなったのである。発掘者の八幡一郎は、「私達は直感的にB地点発見の土器と、E地点発見の土器とが趣を異にして居る事を知った。」（八幡　1924）と報告し、山内清男は「加曽利貝塚の発掘（大正13年3月）は、土器型式の内容決定、層位的事実、年代的考察に向って僕等を躍進せしめた。」（山内　1928）と記録している。後年、「日本先史土器図譜Ⅲ輯」に記載された加曽利B式土器の説明文の冒頭に、

「加曽利B式は関東地方縄文式土器のうち後期の中程に位する型式であって、

大正十三年下総千葉郡都村加曽利貝塚B地点貝層の土器を標準として認められたもの」(山内　1939)

として型式名の由来を説いている。

その後、縄文土器研究の進展に伴なって、新しい土器型式がつぎつぎと追加され、土器編年網が次第に整備され構築されていったその中で、「加曽利B式土器」と「加曽利E式土器」の名は、関東地方の土器型式として確固不動の地位が与えられている（安孫子　1978)。

しかしながら、この型式名が付けられた由緒ある標準資料は、ついに公表されなかった[1]。型式内容の具体的な紹介は、「日本先史土器図譜Ⅲ輯（1939年10月）と同Ⅳ輯（1939年11月）の図版の中の34個体の加曽利B式土器で試みられてはいるが、加曽利貝塚出土品は、わずか1個に過ぎない。同じように、「日本先史土器図譜Ⅳ」(1940年8月）に載っている加曽利E式土器の場合も、全て他の遺跡からの出土品によって占められている。おそらく完形品が極めて少なく、形態と文様の説明に適した資料としては、千葉、茨城、東京、神奈川の、加曽利貝塚に近い県内あるいは都・近接県の遺跡出土品を使わざるを得なかったのではないかと思われる（八幡　1968)。本来ならば、加曽利貝塚出土資料の紹介を通して、型式内容の説明がなされるべきが本筋であろう。

これを補うためにも、その後の発掘調査によって得られた加曽利貝塚の土器は、たとえ出土地点や層位が型式認定に使われたものと同一ではないとしても、少なくとも型式名が認定された同じ加曽利貝塚資料として重要であり、また大切に扱わなければいけない。例えば中央標準時の子午線で有名な明石と同じように土器型式の一つの基準となる加曽利出土土器は、標準土器型式研究を充足させるものであり、それができて初めて名実ともに「加曽利B式土器」と「加曽利E式土器」の型式論の実体が解明されていくと思われる。加曽利貝塚の出土土器は、今なお土器型式内容の吟味と研究にとって、大きな課題を担っているといえる。

もちろん、最初に標準資料を発掘し認定した遺跡の出土土器が、型式論的な検討を経た後に、必らずしも他遺跡出土資料よりも標準資料としての適格な属性を

多く持っているとは限らない。ただ単にその型式研究の出発点としての意味しかもたない場合さえある。しかしその立場をふまえても、なおかつ加曽利貝塚出土土器は、問題提起の上にたつ出発点の土器として、その座標軸を明確に把握しておく必要があろう。更に、日本考古学史に名を留めた出土資料の意義は、そこにあるばかりではなく、今後の土器研究の一層大きなひとつの基準点を発見することにもなろう。それはこれからの土器型式論研究の原点を見定めることにもなり、ひいては型式内容の検討を通して、土器型式認定の作業の困難さを理解できると共に、縄文土器の型式論研究の発展につながることにもなろう(2)。

土器型式の確実な基準は、年代学上の単位であると同時に地域的な分布の特徴を示すことにもなる。加曽利貝塚で認められた土器は、広く関東地方一円のみならず、更に遠い他の地域にまで分布しているものさえある（永峯　1983)。それは土器を作り、使った人間集団の広がりや交流をも想像させる分布圏を構成する。土器は、土器だけに終るものではない。その背後にある人間行動、土器を作りそれを使った人間の生活の基盤と深く係わっていることが推定される。

(1)　この時に発掘された貝類資料は、平野信太郎（1926)「加曽利貝塚の貝類について」人類学雑誌　14－7、として報告があるが、それ以外の出土資料は、なぜか報告されていない。

(2)　土器型式基準の設定のあいまいさから引き起こされたと思われる型式認識の混乱は、樋口昇一、鈴木保彦、能登健（1981）関東、中部、北陸地方「縄文土器大成」2－中期　講談社　P157に、加曽利E式土器の場合の、研究者による型式の違いがみられる。参考のために記しておく。

2)　縄文土器論　――名称と技法――

ところで「加曽利B式土器」や「加曽利E式土器」は、周知の通り縄文土器の

本書 鈴木 (1981)	吉田 (1956 1958)	坂詰 (1965)	栗原 (1962)	堀越 (B) (1975)	堀越 (A) (1972)	新藤 (1976)	米田 (1980)	岡本・戸沢 (1965)	谷井 (1974)	宮崎 (1979)	山内 (1969)	能登 (1975)	戸田 (1976 1977)	神奈川考古 (1978 1980)	安孫子他 (1980)
E 1式	E I	E I	E I	E I	E I	E I(a)	E I(a)	E I	E I(前)	E I(前)	E 1 ～ E 2	E 1	E 1	I	I
E 2式		E II				E I(b)	E I(b)		E I(中)	E I(中)		E 2	E 2	II a	
														II b	II
									E I(後)	E I(後)				II c	III
E 3式	E II	E III	E II	E II	E II	E II	E II	E II	E II	E II(前)	E 3 ～ E 4	E 3	E 3(古)	III	IV
	E III									E II(後)			E 3(新)		V
										E III(前)					
E 4式					E III	E III	E III(a)	E III	E III	E III(後)		E 4	E 4(古)	IV	VI
			E III	E III			E III(b)	E IV	E IV	E IV			E 4(新)		VII

表1　加曽利E式土器編年の各説対照表

枠組みの中に加えられている。その各種の型式を総称する縄文土器は、どのような経緯を経て、決められてきたものであろうか。

日本考古学に、科学的でしかも実践的な研究を導入した大森貝塚の発掘者、E．S．モースは、縄文土器を「cord marked pottery」と呼んでいる（東京都大森貝塚保存会1967：近藤、佐原　1983)。モースの英文報告書と同じ1879年発行の和文報告書「大森介墟古物篇」では、矢田部良吉が「索紋」または「席紋」と訳している[3]。文様の原体が不明であった時には、やむを得ない用語であったと思われる。ところが、植物学者の白井光太郎は、1883年、大きな索と小さな縄とを意識的に区別して「縄紋土器」という用語を使った（渡辺　1980)。おそらく、ツナ、ナワ、ヒモの区別は、植物繊維に対する造詣が深い白井にしてはじめて訳語としても適切な「縄紋」を使わしめたものと思われる。その後1888年、神田孝平は「縄文土器」という用語を使い始め、これが現在に至っているのである（江坂　1980)。

ただし「縄文土器」という名称は、「貝塚土器」（坪井正五郎　1886)、「石器時代土器」(坪井正五郎　1895)、「アイヌ式土器」（鳥居龍蔵　1917）など、出土遺跡の状態や時代名、または人種論にかかわる土器名称の登場など、多くの曲折を経て現在に収束されてきている。用語ひとつにも、その時代の学説や研究情勢が無意識のうちに反映していることがわかる。江坂輝彌の編集した「縄文土器名称変遷一覧表」(1980）は、多少の遺漏があるとはいえ、よく集成されており、名称の動向をよく示している。

「縄文」という名称に伴なって、その名前にふさわしい技法の解明が問題となったが、「縄文」がどのように施文されたかは、直ちに解き明かすことはできなかった。

その先覚者の一人である坪井正五郎は、1889年（日本考古学講義）の“押紋”の中で、席紋、網紋、縄紋という種類があることを示し、その後の西ヶ原貝塚の報告（1893年）では、縄紋という用語は消えて、席紋と布紋のみとなっている。したがって今使われている「縄文」とは異なるものに、この用語が使われていたことがわかる。しかし席紋を細かく分析し研究しようとした姿勢は、「席紋計」を

提唱者	年代	発表文献	提唱名
Edward.s.Morse	1879	Shell Mounds of Omori	Cord marked pottery
エドワード・エス・モールス 撰著 矢田部良吉口訳 寺内 章明筆記	1879	大森介墟古物編	索文
坪井正五郎	1886	人類学会報告1号	貝塚土器
白井光太郎	1886	人類学会報告3号	縄紋土器
羽柴雄輔	1886	東京人類学会報告1巻8号	貝塚土器
淡匪(神田孝平)	1888	東京人類学会雑誌4巻34号	縄文土器
若林勝邦	1890	東洋学芸雑誌110号	縄紋土器
羽柴雄輔	1891	東京人類学会雑誌6巻64号	縄紋土器
下村三四吉	1893	東京人類学会雑誌8巻85号	縄紋土器
八木奘三郎 下村三四吉	1894	東京人類学会雑誌10巻97号	貝塚土器
坪井正五郎	1895	東京人類学会雑誌11巻116号	石器時代土器
蒔田鎗次郎	1896	東京人類学会雑誌11巻122号	貝塚土器
大野延太郎	1905	東京人類学会雑誌20巻230号	貝塚土器
八木奘三郎	1906	東京人類学会雑誌22巻248号	貝塚土器
江見水蔭(忠功)	1907	地底探検記(単行本)	貝塚土器
和田千吉	1910	考古学雑誌1巻4号	石器時代土器
高島多米治	1913	考古学雑誌3巻11号	石器時代土器
高橋健自	1913	考古学(単行本)	貝塚土器
鳥居龍蔵	1917	人類学雑誌32巻9号	アイヌ式土器
浜田耕作	1918	京都帝国大学文科大学考古学研究報告第2冊	原始縄紋土器 アイヌ縄紋土器
中山平次郎	1918	考古学雑誌8巻5号	貝塚土器
喜田貞吉	1919	民族と歴史1巻6号	アイヌ式土器
浜田耕作	1920	京都帝国大学文学部考古学研究報告第4冊	縄紋土器・縄文式土器・国府式縄紋土器
島田貞彦 梅原末治	1920	京都帝国大学文学部考古学研究報告第5冊	貝塚式土器
浜田耕作 梅原政職	1920	京都帝国大学文学部考古学研究報告第5冊	貝塚式土器
浜田耕作 島田貞彦	1921	京都帝国大学文学部考古学研究報告第6冊	貝塚土器・貝塚式石器時代土器・貝塚土器・アイヌ式土器・曲線式土器・縄紋式曲線文様
浜田耕作	1921	京都帝国大学文学部考古学研究報告第6冊	
浜田耕作	1922	通論考古学(単行本)	縄紋式土器
大山柏	1923	人類学雑誌38巻1号	縄紋式土器
清野謙次	1925	日本原人の研究(単行本)	縄紋土器・貝塚土器 厚手土器・薄手縄文土器
鳥居龍蔵	1925	有史以前の日本(単行本)	アイヌ派土器
山内清男	1925	人類学雑誌40巻5号	縄紋土器・石器時代土器
後藤守一	1927	日本考古学(単行本)	縄文式土器
長谷部言人	1927	人類学雑誌42巻1号	石器時代土器
島田貞彦	1928	滋賀県史蹟調査報告第1冊有史以前の近江	縄紋式土器
中谷治宇二郎	1929	日本石器時代提要(単行本)	縄紋土器
浜田青陵	1929	博物館―日本児童文庫―　アルス刊	縄紋式土器

表2　縄文土器名称の変遷一覧表

考案して縄文の密度計としていることからもわかる。それを利用することによって縄文に対する観察眼が細かくなり、文様の基本単位にまで及んで、条や節を基準とする比較が試みられるようになった。しかし残念なことに、編み物と織り物にみられる精粗の差に視点が置きかえられてしまったのは、不幸なことであった。

「席紋或は布紋と云ふのは、編み物或は織物を押し付けた痕で、其区別は只目が粗いか細かいかと云ふ点に在る」

と書かれていることからも、席紋を使う意味とその技法との間には、深い関係があったことが理解できるだろう。ところが、この観察眼の良さが、土器底部の分析に大変大きな威力を発揮し、その圧痕の本質を解明するという成果を挙げたのである（坪井　1899)。それはそのまま土器全体の文様を理解する出発点ともなり、ついには土器底部の圧痕と同じような、またはそれに近似する方法によって施文したと考える結果となったのである。しかし初期の研究段階では、底部の圧痕は

「製造ノ時ニ用ヰタ台ノ痕デ故ラニ付ケタノデハゴザリマスマイ。腹壁ニ在ル模様ハ実ニ疑ヒモ無ク装飾ノ為ニ付ケタモノデゴザリマス」(坪井　1889)。

としていることから、当時は底部圧痕と胴部文様とを明らかに識別していたのである。ところが研究の進展に従い、次第に底部圧痕の研究成果に、胴部文様の手法が引きずられて、同じ手法と解釈する結果となったのであろうか。ここに先覚者の悩みと苦しみがあったのである。

中山平次郎（1918年）は、縄文、弥生同時代説を打ち出すかたわら、文様研究に手を染め、積極的に櫛の歯先を用いた斜行類似縄文をつくった。席紋の原型を編み物と認め、更に歯状工具から刷毛目文まで説き及んでいる。これは大局的には坪井の文様観察の枠を出るものではなく、ただ概念的に斜行縄文の傾向を理解しただけにとどまったのである。

図案研究者の杉山寿栄男は、北方アイヌから南方台湾蕃族にまで広げて、巾広く資料の収集を行ない、文様を体系的に整理することを目指し、土器文様構図の研究に優れた成果を挙げている（1928年)。しかしその中で縄文施文にふれ、「実

は縄の目ではなくて蓆様の目」であるとして「正しくは蓆目紋又は縄蓆紋土器と呼ばれなければならない」と主張している。そして「多様な織物もその基礎的織方は普通平織、綾織及び繻子織の三種」であり、そのうち「斜線方向の縄紋及羽状縄紋は、この綾織に類するもの」と考えていたのである。

中山平次郎、杉山寿栄男の両先覚者達は、斜行縄文が普通の織り物や編み物とは異なる性格のものであろうと、疑問を持ちつつも、正合性を見出せずに、坪井以来の見解に妥協せざるを得なかったのである。

一方、山内清男は、縄文土器の編年研究を通して、縄文の実体にせまり、「斜行縄紋に関する二三の観察」(1930年) の中にみられるほど、細かな比較研究を進め、それぞれの土器型式により縄文の特徴を明らかにしつつあった。そして、それが土台となって翌年、「縄文」の正体が、縄の回転技法によるものであることを見極めたのである (山内　1979)。この劇的な発見の経緯や経過は、八幡一郎、甲野勇、伊東信雄等の発言によって知られているが、口頭発表が先行したために、いくつかの疑念も生まれた。しかし山内清男没後に公表された博士論文「日本先史土器の縄紋」(1979年) とその業績をみる時、「縄文」研究に打ちこんだ意図と方向性とがはっきりと理解でき、土器型式認定のもっとも重要な要素として取り組まれていたことがわかる。この姿勢は、すでに「磐城国三貫地貝塚発見土器の撚糸紋」(1925年) にもみられ、

「各土器片に就き油土又は石膏を用ゐて陽型をも作り、仔細に点検し、又、此等の材料に見られる網様組織のほか、尚諸書に散見する実例或は推定例を参照し」ている。つまり、同じ種類の文様を比較する実験的研究の結果得られた成果が、凹と凸との関係にある文様と原体との関係を追求し、ついに原体の秘密を解き明かすことになったものである。その試行錯誤の過程は、先にも述べたエピソードとして残る程、苦難に満ちたものであったのだろう。ここに縄文原体の謎は、回転技法を通じて解明され、ついには、縄文土器自体の根本的な理解にまで深められていった。実に、文様技法の特徴は、層位論と型式論の構成要素のひとつとして、縄文編年に寄与している。

(3) 東京都大森貝塚保存会（1967）大森貝塚　中央公論美術出版　P126　矢田部良吉訳によるとP56のcord marked pottery に対して「席紋」の訳が与えられている。矢田部はこれまで、「索紋」とだけ訳していたといわれていたが、今回初めて、二通りの訳があることを発見した。これ以後、坪井正五郎によって「席紋」という用語が使われ始めたが、おそらく、この矢田部訳が元になっていると思われる。矢田部と坪井との直接的な関係は不明であるが、用語「席紋」の起源はここにあるのではないだろうか。麻生優、白石浩之著「縄文土器の知識Ⅰ」(1986) P 2 で「索紋」のみを使用したのは、原典にあたらなかったための誤りである。

3) 縄文編年の最初の立案者　――松本彦七郎――

良く知られているように、大森式土器から陸平式土器への変化を推定したのは、八木奘三郎と下村三四吉（人類学雑誌　1894）の両先学であった（ドルメン編輯部　1935)。その後、組織的に土器の編年的研究に取り組まれたのが松本彦七郎であった。その業績を追いつつ、当初の縄文編年がどのようにしてできあがってきたかを振り返ってみることにしよう。

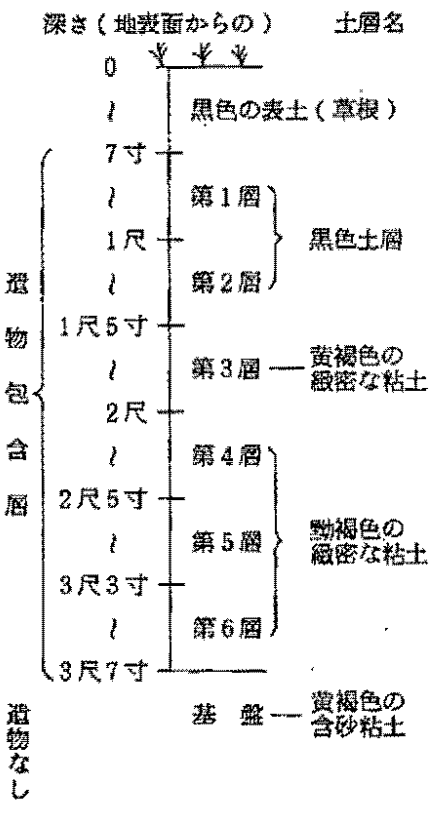
1887年、栃木県に生まれた松本彦七郎は、東北大学で古生物学や地質学を専攻するかたわら、1917年頃より考古学の分野にまで、その研究領域を広げていった。彼は土器や石器の相違は種族や部落の違いを示すとする鳥居龍蔵らの説に反対し、その相違は時代差であることを「動物学雑誌」で主張した（麻生　1958)。更にその翌年には、イノシシ、シカ、イヌ、ハマグリや人骨等の自然遺物の個別研究を通して、日本石器時代の理解を深めようとした。その研究態度は、「予は事実なり実物なりに重きを置き、臆説には重きを置かぬ」(松本　1918）として、浜田耕作の原始縄文土器を批判し、土器には上下の時代差があるらしいとしたのである。

1919年、今まで人種論と同一視して論じられることが多かった土器研究を、ようやく分離させて、遺跡にしたがって編年的研究を進めるようになる。「陸前国宝ヶ峰遺跡の分層小発掘成績」と「宮戸島里浜介塚の分層的発掘成績」(松本　1919)

地方	型式	中期	晩期	後期	考古学者	文献	年代
関東地方	太郎式	勝平式		八木奘三郎 下村三四吉	八木奘三郎	下総国印旛郡瀬戸村貝塚発掘報告	明治二七年
	勝平式	勝平式		鳥居龍蔵	鳥居龍蔵	有史以前の武蔵野	大正九年
	安行式—加曽利B式—称名寺式	加曽利B式—称名寺式—阿玉台式	称名寺式—堀之内式—三戸式	八木奘三郎	人類学雑誌 一三の九	人類学雑誌 一〇の九	明治三〇年
			称名寺式（木式の年代観は誤りなり）	徳永重康	考古学雑誌 一の八	大正一〇年	
				大場磐雄	考古学雑誌 四の九 四の一	大正一三・四年	
	称名寺式（本式の年代観は誤りなり）			下総国印旛郡瀬戸村貝塚発掘報告	考古学雑誌 一の八	大正一〇年	
関東地方	安行式—加曽利B式—堀之内式	加曽利B式—称名寺式—阿玉台式	称名寺式—堀之内式—三戸式	山内清男	三の新説	新行程説に属する二	
	第四期 第三期	加曽利B式（新説）（旧説）（阿玉台式を含む）	称名寺式（新説）（旧説）（阿玉台式を含む）	杉山寿榮男	環状七類	日本考古図録大成	昭和六年
	大森式	称名寺式	称名寺式	大山柏	Yoichiro Iwata Shin'ichi Ogawa Kazuo Kamiyama Tomoyuki Ito Kiyoshi Kobayashi (Mitsuhiro Yoshida)		昭和七年
	第二期 第一〇期 第九期 第八期 第七期	第六期 第五期 第四期	第三期 第二期 第一期	甲野勇	関東地方縄文式土器の年代（考古学雑誌 六巻九号）	史前学雑誌 七の三	昭和十年
	第四期 第三期	第二期	第一期	八幡一郎	北佐久郡の考古学的調査		昭和九年
東北地方	山形式	大木10—9式—同8式—同7式	大木8—3式—同2—4式—称名寺式—称名寺式下層式	山内清男	新行程説に属する二三の新説	史前学雑誌 二の三	昭和五年
	宮戸式（山形縄紋期）（図録式を含む）	大木式—青島式		長本浩七郎	宮戸島貝塚発掘調査報告 日本先史人類論	現代之行学 七の五・六 歴史と地理 三の二	大正八年
	出戸式(a) 津軽式(b) 恵比寿平式(c) 恵比寿式(d) 鬼越式			(a)島居龍蔵 (b)富田貞吉 (c)長谷部言人 (d)大場磐雄			
	出戸式 大木10—9式						
北海道方	縄岡式	国縄土器	国縄土器上層式	長谷部言人	国縄土器文化	新行程説に属する二三の新説	昭和二年
	縄岡式	国縄土器上層式	国縄土器下層式	山内清男	新行程説に属する二三の新説	青森県東津軽郡三厩村	三年
	縄岡式	一五寺式土器の形	一五寺式土器の形	宮坂光次	史前学雑誌 二の六	史前学雑誌 二の三	昭和五年

凡例
すべを打移式型 ——
すべを存併期同 ——
式型一の名命未 □

表3　東日本に於ける縄文土器型式一覧表（ドルメンによる）



a） 層位概念（麻生作図）

	線文縄文	線文無縄文	単方向縄文	不詳縄文	羽状縄文	認定羽状縄文	無文	全不明	無文底面	網代文底面	木葉文底面
第一層	2 (9)	0	0	4 (18)	4 (18)	6 (27)	6 (27)	0	1'	0	0
第二層	4 (7)	2 (3)	8 (13)	13 (22)	13 (22)	11 (18)	9 (15)	5	2"	0	1'
第三層	7 (18)	0	4 (10)	10 (26)	6 (15)	5 (13)	7 (18)	0	2"	0	0
第四層	11 (14)	2 (3)	39 (51)	1 (1)	6 (8)	1 (1)	16 (21)	3	1'	0	3"
第五層	30 (22)	3 (2)	73 (67)	0	0	0	23 (18)	2	2'	3"	1
第六層	9 (16)	1 (2)	35 (63)	0	0	0	11 (20)	0	1'	1'	3'''

b） 文 様 別

	二―三ミリメートル	一―二ミリメートル	九―一〇ミリメートル	八―九ミリメートル	七―八ミリメートル	六―七ミリメートル	五―六ミリメートル	四―五ミリメートル	三―四ミリメートル	二―三ミリメートル
第一層	0	0	0	1 (5)	1 (5)	4 (18)	10 (45)	6 (27)	0	0
第二層	0	1 (2)	1 (2)	4 (6)	3 (5)	11 (18)	19 (31)	17 (27)	6 (10)	0
第三層	0	1 (3)	2 (5)	0	3 (8)	8 (21)	12 (31)	9 (23)	2 (5)	2 (5)
第四層	1 (1)	0	4 (5)	9 (12)	10 (13)	24 (32)	18 (24)	10 (13)	0	0
第五層	0	1 (1)	1 (1)	6 (6)	30 (23)	44 (34)	35 (27)	10 (8)	0	0
第六層	1 (2)	1 (2)	1 (2)	5 (9)	17 (30)	17 (30)	9 (16)	4 (7)	1 (2)	0

c） 土器の厚さ別（一部改変）

表4　松本の層位概念と土器分類（宮城・宝ヶ峰）

とは、実践的な層位論研究を通して「遺物は取捨する事なく全部を収集せり」、「茲には特に土器の数量的研究に就て報告せむとす。」と発掘調査の客観的事実に重きをおいて分析を試みている。この態度が遺跡の型式や時代別つまり現在の型式論研究に結びつき、その基礎的作業として文様や形態研究がつみ重ねられた。「模様の変遷」、わけても口縁部から底部までを、第1次模様から第4次模様に別けて文様帯を観察する。その研究姿勢がついにつぎのような編年区分を可能にした。

第一期　大木式（模式〔今の型式名をつけた標準遺跡名〕は陸前国七ヶ浜村大木介塚）

第二期　獺沢（オソザワ）式（模式は陸前国気仙郡獺沢介塚）

第三期　宮戸式（模式は陸前国宮戸島里浜介塚）

第四期　大境五層式（模式は越中国大境白山社洞窟遺跡の第五層）

第五期　大境四層式（模式は大境第四層）

第六期　埴瓮斉瓮時代

この編年案は、「日本先史人類論」（歴史と地理）のみならず「宮戸島里浜及気仙郡獺沢介塚の土器 ― 特に土器文様論 ―」（現代之科学）や「日本石器時代土器」（理学界）にも使われている。内容説明は後出のものほど簡単明瞭となってきており、ある場合には、ひとつの時期を2分し、「古い型」と「新しい型」とを認めて全体を12に細分している。

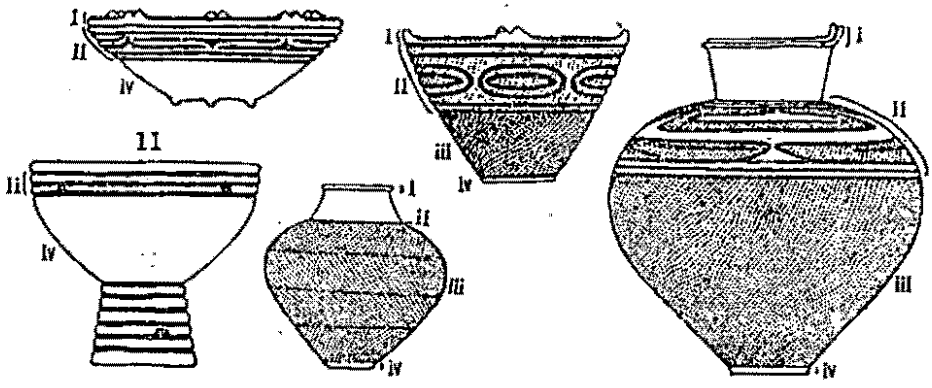


図1　松本の文様帯区分

しかし、この立場は、地方差を認めないために、東北地方だけという場合にはよいが、他の地方に及ぶ時には混乱が生ずる。例えば第四期大境五層式は、「備中国津雲介塚及び河内国府遺跡」を同列と見なすことになる[4]。やはり発掘調査に基づく層位論研究と、形態と文様の変遷を系統的に追う型式論研究とは車の両輪としての重要な役割を分担しているといえる。

松本の実践研究を高く評価した慶応義塾大学の鈴木公雄（1984年）は、松本における「層位」と「型式」との結びつきを説きながら、「少なくとも松本は自己の資料を開示したうえで論議をしようという自然科学者としての立場にきわめて忠実であった」とする。そこにこそ模式を明記して、型式名をつけた標準資料の基準点をはっきりさせる態度が生まれたのである。

「弥生式の模式は如何。ある学者は弥生介塚より出土したるただ一個の土器が模式なりとし、他の学者はただ一個ならず一群の土器がそれなりとす。しかも聞くがごとくんば弥生介塚はアイヌ式土器をも産せりと云ふ。かくては、いづれにしても土器の式別にして遺跡の式別には非ず。もし遺跡の式別とならば名称の外形は模式指示的なるにもかかわらず、実質は空定義的なり。」ときびしい批判を加えて、型式論の資料的根拠が遺跡や層位によって認定されることを主張している。

このようにして松本は、遺跡の層位的発掘からその出土資料の整理と検討を重ねて、土器の属性分析（文様と形態の変化）にまで至り、編年を組立てている。つまり実践的な層位論と型式論との結合の上に編年論研究を進めたのである。1919年に考古学上の重要な方法論を駆使して、最初の縄文編年を立案したことは、その後の日本考古学に大きな影響を与えたのである。松本の業績は、よく言われるように、山内清男、甲野勇、八幡一郎らによって継承され発展をとげ、今日の大系が出来上ったのである（麻生　1985)。しかし子細に検討すると、なお松本から学ぶべきことは多い。鈴木公雄の松本彦七郎論は、単なる人物論ではなくて、学問の方法論の基礎、わけても層位論と型式論とを綜合化した編年的研究を問題にとりあげ、それをどのように論証するかを問うているという意味で、大切である。すでに忘れられてしまった視点を正しく掘り起した意義は大きい。

(4) American Anthropologist 23－1（1921）に発表された松本の論文“Notes on the Stone Age People of Japan”による編年は、青島－宮戸－津雲－国府－大境－東阿高－亜となり、全国的な規模となっているが、これは地方差を認めないための誤りである。これはすでに麻生優（1958）で指摘してある。

加曽利貝塚にまつわる問題点を中心にして、縄文土器について三項目をとりあげた。

この原稿をまとめるにあたって、古い資料や参考文献を再度細かく調べた結果、思わぬ発見をした。それは先にのべた通り「席紋」の訳語である。これは文様研究史の興味ある課題を投げかけている。なお、すぐに究明にとりかかりたい思いで一杯である。

膨大な資料をもつ加曽利博物館の中にも、忘れられた眠っている重要な収蔵資料が潜んでいるに違いない。再度ふり返って、古い資料を研究して、その中に隠れている新しい息吹きをぜひ掘り起こして頂きたい。そのような願いをこめて、この一文をまとめた。加曽利博物館の学芸員の皆様の研究が益々発展することを祈りつつ終りとしたい。

引　用　文　献

麻生　優　（1958）層位的研究のおこり　考古学手帖 4

麻生　優　（1975）「原位置」論の現代的意義　物質文化24

麻生　優　（1985）層位論　日本考古学 1　岩波書店

安孫子昭二（1978）縄文式土器の型式と編年　日本考古学を学ぶ(1)

E．S．モース（近藤義郎・佐原真訳）（1983）大森貝塚　岩波書店

江坂　輝彌（1980）縄文土器文化研究小史　月刊考古学ジャーナル174

杉山寿栄男（1928）日本原始工芸概説

鈴木　公雄（1984）松本彦七郎論――土器研究にみる層位と型式の関係
縄文文化の研究10　雄山閣

坪井正五郎（1893）西ヶ原貝塚探求報告　東京人類学雑誌８－85、89　９－91、93

坪井正五郎（1899）日本石器時代の網代形編み物　東京人類学雑誌14－161

東京都大森貝塚保存会（1967）大森貝塚　中央公論美術出版

ドルメン編輯部（1935）東日本に於ける縄紋式土器型式一覧表

中山平次郎（1918）貝塚土器の縄紋と古瓦の縄紋　考古学雑誌８－12

永峯　光一（1983）縄文土器大成２　中期　講談社

松本彦七郎（1918）日本石器時代人類に就て　人類学雑誌33－９

松本彦七郎（1919）陸前国宝ヶ峯遺跡の分層的小発掘成績　人類学雑誌34－５

松本彦七郎（1919）宮戸島里浜介塚の分層的発掘成績　人類学雑誌34－９、10

松本彦七郎（1919）日本先史人類論　歴史と地理３－２

松本彦七郎（1919）宮戸島浜及気仙郡獺沢介塚の土器――特に土器紋様論
現代之科学７－５、６

松本彦七郎（1919）日本石器時代土器　理学界17－３、４

山内　清男（1925）磐城国三貫地貝塚発見土器の撚糸紋　人類学雑誌40－２

山内　清男（1928）下総上本郷貝塚　人類学雑誌43－10

山内　清男（1930）斜行縄紋に関する二三の観察　史前学雑誌２－３

山内　清男（1939）日本先史土器図譜Ⅲ　解説

山内　清男（1979）日本先史土器の縄紋　先史考古学

八幡　一郎（1924）千葉県加曽利貝塚の発掘　人類学雑誌39－４、５、６

八幡　一郎（1968）縄文式土器　新版考古学講座　１通論（上）雄山閣

渡辺　兼庸（1980）「縄紋土器」名称の初出　考古学雑誌66－３